

## 論文

# 学校におけるジェンダー・バイアス —ジェンダー・フリーな教育のために—

石 倉 洋 子

Gender Bias at School Education

Yoko Ishikura

### 目 次

- はじめに
- I. ジェンダーとジェンダー・フリーの概念
  - II. 学校教育の中のジェンダー
  - III. 小山市におけるジェンダーチェック調査
  - IV. 調査結果に関する考察
- 結びにかえて

## はじめに

21世紀を目前にして女性も男性も一人ひとりの人権が尊重され、心豊かに生きられる「男女共同参画社会」の実現を目指した取り組みが各方面でなされている。男女を問わず自分の持っている力を最大限に発揮する機会は差別されることなくすべての人に平等に与えられるべきであることは論をまたない。男女の対等性や平等についての意識や感覚を形成する上で家庭教育と学校教育の果たす役割は特に大きい。

しかし、憲法や教育基本法にのっとり平等教育がなされている筈の学校教育の中に「男」「女」に対する固定観念が根強く残っており、ジェンダーにとらわれた考え方が日常的に行われているのが現状である。

なぜ女性は一般に理科系科目が不得意だといわれるのか、小学校の教室には優秀で活発な女子があふれているのに大学院の研究室はなぜ男性ばかりなのか、小学校の先生は女性が多いのに高校・大学と上級の学校にいくほどなぜ少ないのか、成績優秀でまじめな女子学生はなぜ平凡な男子学生より就職に苦勞するのか——これら理不尽な謎に対する素朴な問いは今やっと女性学やフェミニズム教育学からのアプローチで答えが出されようとしている。

これまで女性学が取り組んできた課題の中には、性別役割<sup>1)</sup>とされてきたものの大半は決して生物学的ないし生理学的必然ではなく、社会的・文化的につくられたものである事実を認識すること 現代社会における男女の性別役割が平等で相補的なものでなく優劣関係や二重基準があることを明らかにすること 性別役割の配分がそれぞれの社会の全体構造と密接に結びつき相互に支え合っているその関係を探り出すこと 又々が社会から期待され要求される性別役割を取得していく社会化の過程を明らかにすることなどがある。

そこでジェンダー・フリーな教育を目指すためには児童・生徒、教師、保護者の考えの中にあるジェンダー・バイアス（偏見）に先ず気づくことから始めなければならない。毎日の生活や人間関係の中に何気なく組み込まれているジェンダーに気づき、見直すためにはジェンダーチェック（ジェンダー

・バイアス度のチェック)を行うのが良い方法である。

## I. ジェンダーとジェンダー・フリーの概念

ジェンダーとは男女の生物学的性差 (sex) に由来するものに対して、社会的・文化的につくられた性差のことをいう。

生物学的・解剖学的性差である sex と文化的・社会的性差である gender を区別するようになったのは1960年以降のことである。男女の身体的構造の差異が男と女の感じ方や考え方にどんな相違をもたらしているのか、この間についての確かな答えを我々は持っていないにも拘わらず多くの事柄が身体的差異に帰せられがちである。

新生児は産まれるとすぐ女か男か判定され「女の子」「男の子」というレッテルを貼られる。どちらのレッテルを貼られたかで本人の性自認にもその後の人生にも大きな影響を与えられる。両親や周囲が子供を見る目や子供に対する扱い方の違いで子供自身の自己イメージに影響を及ぼす。男女に振り分けられた子供達は乳幼児期を通じてそれぞれ女らしい(男らしい)生を生きる心理的基盤を形成して行くわけだが、大人達が子供を女らしく(男らしく)育てるように振る舞うことによって女らしさ(男らしさ)は着実に子供の中に定着していく。

親のしつけも女の子に対するものと男の子に対するものとはかなりの違いが見られる。父親も母親も息子や娘の行動をそれぞれの性役割にふさわしい型にはめ込むようにしつけをする傾向にある。特に男の子に対してこのしつけは厳しく行われ、男の子がめそめそ泣いたり人形遊びをするなど男の子らしくないとされる行動をとる場合にはより非難されるのは、男らしさの方が女らしさより価値があるとする男性優位社会の価値観が反映されていると言えるだろう。

ジェンダー・フリーとは人の行動や生き方をジェンダーによって決めつけないことをいう。

「男女平等」の用語はこれまで制度や待遇面での男女間の不平等の撤廃のための運動に使われてきた語であったが、より日常的な男女の行動や心理面を問題とする場合には男女平等よりジェンダー・フリーの用語の方が概念としても分かりやすい。日本ではまだ馴染みの無い語であるが欧米のジェンダー問題ではジェンダー・フリーの用語の使用は普通のことである。

ジェンダー・フリーな社会の実現の第一歩として、今の社会に浸透しているジェンダーに敏感になることが重要である。

## II. 学校教育の中のジェンダー

戦後の教育改革は男女平等の原則に基づいて行われ、男女共学や家庭科の男女共修が実現した。しかし、1960年代に入り、学校教育全体が高度経済成長のために有能な人材の養成へと変化していく中で、高校の家庭科は女子だけの必修科目とされた。1985年日本政府が「女子差別撤廃条約」を批准するに当たりこれが障害の一つとなったことはよく知られるところである。その後、学習指導要領の改定により教育課程の男女同一が一応実現したが、伝統的な性別役割分業観や性の二重基準に基づく道徳観が教育政策決定者及び教師の意識に根強く残っており、この固定観念が女性の能力の開発と自立を目指す男女平等教育の妨げとなっている。

これまでは主に制度面や待遇面における男女不平等の撤廃がテーマであったが、最近はそれにとどまらず、不平等問題の背景にある人々の心のあり方にまで論議が広がっている。

昨今は制度上のあからさまな性差別はなくなってきたが、学校で使われる教科書、カリキュラム、諸行事などが女子生徒に旧来の「女らしさ」を押しつけたり、男子生徒とは別の判断基準を使ったりといった一見しては見えにくい日常茶飯事として慣行化している性差別を生み出している。

学校のカリキュラムには、制度的・形式的な見える部分のほか、意図的でない見えない部分があり、これが子供達の間人形成に大きな影響を与える。

ジェンダー問題についても、こうした「隠れたカリキュラム」<sup>2)</sup>が作用していると考えられる。この「隠れたカリキュラム」は学校におけるジェンダーバイアスを生むメカニズムとして重要な役割を果たしており、こうした文化の存在に気づくことが男女平等教育にとってきわめて重要である。担任教師が男女の性別に対してステレオタイプ<sup>3)</sup>な意識を持ち、「女の子は女らしく」と思っていると、いつの間にかそういう見方が子供達の身に付いていく。男子だけが活発に発言し、女子がおとなしく黙っているようなクラスの場合は、教師が授業で無意識のうちに男子を指名する機会が多かったり、男子に向かって話しかける割合が多いという研究結果もある。

教科書は児童生徒が学習によって基本的な知識・技能を習得し考える力を身につけていく有力な手段である。従って、その根底には人間の尊重と男女平等が貫かれていなければならない。近年、教科書の内容については各方面からの検討が行われるようになり改善されつつあるものの、教科書に登場する女性は男性に比し量的に圧倒的に少ない。しかも殆どの小学校の教科書では父親が外に働きに出て母親が家事を一手に引き受けているという家庭のイメージを描いている。

そのほか絵本やテレビ、雑誌などのマスメディアも子供の社会適応の推進役として大きな影響力を持っている。子供人気アニメーション番組の多くは圧倒的に男性の主人公が多く、人並み以上の優れた戦闘能力を持つ若くてスマートなヒーローが女性と子供を保護して悪人と戦うという、ストーリーが殆どである<sup>4)</sup>。女性は「長い髪・ぱっちりした大きな瞳、スタイルの良い脚」など、どの番組でも同じような女性が準主役として登場する。

外見や容姿ばかりでなく、ストーリーの展開に果たす女性の役割も主人公の恋人役とか弱った人や動物を介護する役割といったステレオタイプのものとなっている。

絵本もテレビも女らしさ男らしさのイメージを固定させ単純化させて繰り返し子供達に伝えている。こうして「女の子」「男の子」が再生産されていくのである。

教育課程や教材のほかにも学校生活の中には長年の習慣で気がつかない性差別が存在する。

入学式や卒業式、運動会、文化祭などの学校行事の運営上の仕事の分担についても性別による役割分業がしばしば行われている。

出席簿や式典などでの呼名についても、いつも「男が先・女が後」の出席簿は学校教育の中で疑問視されることもなく、習慣として長い間自然に行われてきた。毎日毎日男子の後に呼ばれる女子、幼いときから「男は女の先について、女は男の後に付いてくる」という構図ができあがっても不思議ではない。

ある学校で、出席簿を女子が先男子が後にする試みを行ったところ、すぐに男子から「いつも女子が先じゃズルイ」という声が上がったという。しかし男子が先に呼ばれても「ズルイ」という声は聞かれない。子供も大人も長い間の習慣にいかにも慣らされてしまったかが分かる。

こうした反省にたって最近では学校全体で、あるいはクラス単位で「男女混合名簿」を採用するケースが広がってきている。小山市では小学校の一部（27校中7校）で実施されているが中学校は皆無という現状である。

### Ⅲ. 小山市におけるジェンダーチェック調査

男女の性別をめぐるバイアス度（偏見度）をチェックする各種のテストや診断法が女性問題を研究している団体から発表されている。

平成9年度に、小山市女性問題懇話会も小山市民を対象にジェンダーチェック調査を行った<sup>5)</sup>。調査は一般市民、老人クラブ連合会、女子短期大学生などを対象にしても行ったが、ここでは市内の小学校、中学校を対象にしたものだけについて考察する。

## 調査のあらまし

### 1. 調査の目的

この調査は社会的、文化的につくられた性差（ジェンダー）が、実際の社会習慣や日常生活の中に、どれほど組み込まれているかを見るものである。同時に回答を通して、これまで社会の常識と考えられていたことが、ジェンダーによる決め付けであることが多いことに気づいて貰うことを期待した。

### 2. 調査の方法

対 象 ； 平成9年度の小山市道徳教育指定校である小・中学校

- ① 小学生（市立梁小学校1～6年児童）
- ② 中学生（市立乙女中学校1～3年生徒）
- ③ 教師（市立梁小学校、乙女中学校教員）
- ④ 保護者（市立梁小学校、乙女中学校児童生徒の保護者）

チェックシート ； 財団法人東京女性財団作成のものを使用した。

調査期間 ； 平成9年8月21日～9月30日

配布、回収 ； 市教育委員会および市民部女性行政課

### 3. 回収結果

① 小学生	154人	（男 71人 女 65人 不明18人）
② 中学生	375人	（男157人 女191人 不明27人）
③ 教師	35人	（男 19人 女 15人 不明 1人）
④ 保護者	479人	（男 53人 女381人 不明45人）
合計	1,043人	（男300人 女652人 不明 91人）

## ジェンダーバイアス度 &lt;小学生&gt;

## ① さいほう箱の色は？

さいほう箱を買うことになったんだけど、水色と赤とどっちにする？  
あなたはどのように思いますか。どれかに○をつけましょう。

	全体	男	女
ア 男子は水色がいいと思う	19.5%	26.8%	9.2%
イ 好きな色ならどちらでもいいと思う	74.7%	64.8%	78.7%
ウ ほかの男子のようすを見て多いほうに決めたらいいと思う	5.8%	8.5%	3.1%

## ② まっすぐぬえるよ！

あなたはさいほうや料理は、女の子に向いていると思いますか。  
どれかに○をつけましょう。

	全体	男	女
ア 女子に向いていると思う	17.5%	23.9%	12.3%
イ 女子でも男子でも練習すれば、だれだってできると思う	77.9%	67.6%	86.2%
ウ よくわからない。先生や友だちはどう思うか聞いてみる	4.5%	8.5%	1.5%



## ③ 児童会の会長はだれに？

児童会の会長にはどんな人を選んだらよいでしょうか。  
あなたはごどう思いますか。どれかに○をつけましよう。

	全体	男	女
ア 会長は男子の方がいい	20.1%	28.1%	12.3%
イ 会長は男子でも、女子でもふさわしい人になるといい	74.7%	66.2%	84.6%
ウ 友だちや先生はごどう考えるか聞いてみる	4.5%	5.6%	1.5%

## ④ サッカークラブに入りたい！

サッカーはかっこいいよね。私もサッカークラブに入ろうかな。  
あなたはごどう思いますか。どれかに○をつけましよう。

	全体	男	女
ア サッカークラブは男子だけがいい	39.6%	50.7%	26.2%
イ 女子でもやりたい子はサッカークラブに入った方がいい	55.2%	46.5%	67.7%
ウ 先生やほかの友だちにも聞いてみる	5.2%	2.8%	6.2%

⑤ 保健係はだれ？

あなたのクラスで、係を決めるときのことです。

あなたはどう思いますか。どれかに○をつけましょう。

	全体	男	女
ア 保健係は女子、体育係は男子というように係で女子と男子を分けた方がいい	24.0%	32.0%	16.9%
イ どの係も男子と女子の両方いた方がいい	69.5%	60.6%	76.9%
ウ 先生や友だちはどう思うか聞いてみる	6.5%	7.0%	6.2%

⑥ 名前を呼ばれる順番は？

出席をとるとき、名前を呼ばれる順番はどうでしょうか。

あなたはどう思いますか。どれかに○をつけましょう。

	全体	男	女
ア 男子（女子）が先に呼ばれる方がいい	33.1%	33.8%	32.3%
イ 男女がまざって呼ばれる方がいい	14.9%	15.5%	12.3%
ウ どちらでもいい	51.9%	50.7%	55.4%

## ジェンダーバイアス度 <中学生>

### ① 学生生活をチェックしてみましょう。

#### 「はい」と答えた人

	全体	男	女
出席簿や名前を呼ばれるとき、いつも男子が先で、女子があと	97.1%	96.8%	97.4%
班や席順が、男女で分かれてしまう	25.6%	30.6%	20.4%
先生が生徒を注意するとき、個人名ではなく、「女子は～」「男子は～」と言う	35.5%	33.1%	36.1%
運動会の応援団長はいつも男子がやる	93.1%	93.0%	93.2%
先生から、やさしい女の子、頼りがいのある男の子がよい、と言われる	20.1%	23.6%	17.3%
生徒会の会長は男子、副会長は女子と決まってしまう	14.4%	15.3%	11.0%
女子の成績が良かったり、女子がリーダーになると「生意気だ」と言われる	9.1%	8.3%	9.4%
体育で、女子はダンス、男子は柔道・剣道と決まっている	14.1%	15.3%	11.0%
女子は将来家庭に入るから、あまり勉強を頑張らなくてもいいと言われる	9.9%	6.4%	13.1%
女子ばかり（あるいは男子ばかり）にちやほやする先生がいる	60.5%	61.1%	60.2%

② あなたの心の中をチェックしてみましょう。

「そう思う」と答えた人

	全体	男	女
やっぱり女は女らしく、男は男らしいほうがいい	47.2%	59.9%	36.6%
理系は男子、文系は女子が向いている	13.3%	12.1%	13.1%
男子は浪人してもしかたがないが、女子はしないほうがいい	13.9%	12.7%	14.1%
やっぱり女の子の幸せは結婚だよ	29.1%	26.6%	27.8%
かわいい女の子は性格もいいよね	6.9%	10.2%	3.1%
結婚したら、家事や子育てを一緒にしよう (「そう思わない」と答えた人)	24.4%	27.4%	22.0%
結婚したら、男は家族を養うものだ	65.6%	68.2%	61.8%
力仕事は男にまかせよう	58.7%	52.9%	60.2%
これからの男子は料理や洗濯ができなくちゃ (「そう思わない」と答えた人)	34.9%	42.0%	28.8%
運動部のマネージャーは女子がよい	48.8%	55.4%	43.5%
女子はあまりでしゃばらないほうがいい	13.9%	21.7%	7.9%

## ジェンダーバイアス度 <教師>

### ① あなたの学校をジェンダーチェック

「はい」と答えた人

	全体	男	女
持ち物の色を男女で分けている	85.7%	94.7%	73.4%
生徒が整列するとき、男女別々だ	100%	100%	100%
並んだり、行進するのは男子が先だ	8.6%	5.3%	13.3%
生徒会やクラスの委員長は男子、副委員長や書記は女子がやることが多い	0%	0%	0%
運動会で、男子は道具係、女子は接待係というように、男女別に役割分担が決まることが多い	2.9%	5.3%	0%
体育では、ダンスは女子、柔道・剣道は男子と決まっている	0%	0%	0%

② あなたの職場をジェンダーチェック

「はい」と答えた人

	全体	男	女
校務分掌は女性向け・男性向けで分ける傾向がある	14.3%	10.5%	20.0%
教務主任、学年主任など、主任はすべて男性教師だ	5.7%	5.3%	6.7%
研修、出張に行くのはほとんど男性教師だ	0%	0%	0%
職員会議での女性教師の発言は軽視されることが多い	0%	0%	0%
男性教師は育児休業を取りにくい雰囲気がある	45.7%	47.4%	46.7%
女性教師が職員会議を中座すると、男性教師なら平気なのに、イヤな顔をする教師が多い	0%	0%	0%
運動部活動の指導が不得意な男性教師は肩身の狭い思いをする	20.0%	15.8%	20.0%
来客にお茶を出すのはたいてい女性教師か女性職員	85.7%	73.7%	100%

## ③ あなた自身をジェンダーチェック

## 「そうしていない」と答えた人

	全体	男	女
運動会の応援団長をやりたいという女子がいたら積極的に応援する	2.9%	0%	6.7%
男子に「女に負けるなんてだらしがない」と言ったことは一度もない	31.4%	42.1%	20.0%
「男のくせに泣くな」とか「女なのだから気配りを」というような、男女を区別した指導をしないようにしている	22.9%	26.3%	20.0%
女性が主人公の教材や女性についての資料などを積極的に授業に取り入れるようにしている	60.0%	57.9%	60.0%
「家事や育児は女性の仕事」と考えている生徒がいたら、その考えを改めるように指導している	28.6%	36.8%	20.0%
女子にも男子にも同じように「さん」づけ、あるいは「くん」づけで呼んでいる	25.7%	36.8%	13.3%
女子にも男子にもジェンダーの枠にとらわれず新しい分野に挑戦するように励ましている	17.1%	21.0%	13.3%
保護者は父親だけを指すのではないことをきちんと生徒に伝えるようにしている	11.4%	5.3%	13.3%

## ジェンダーバイアス度 &lt;保護者&gt;

## ① 「子どもへの期待」をジェンダーチェック

子どもたちの学校生活について、あなたはどのように考えていますか。

「はい」か「いいえ」に○をつけてください。

## 「はい」と答えた人

	全体	男	女
合唱の指導者などのリーダーシップが必要なものは、やはり男子がなったほうがいい	11.5%	22.6%	9.2%
野球部やサッカー部をつくりたいという女子は男子チームのマネージャーになればよい	7.5%	15.1%	6.3%
男子には、家の手伝いをしなくてもいいから、よい成績をとってほしい	3.1%	9.4%	2.4%
応援団長をやりたい女の子がいたら、ぜひ実現させたい (「いいえ」と答えた人)	13.6%	13.2%	12.6%
進学や就職などについては、女子のほうが男子に比べて気が楽だ	27.8%	26.4%	28.3%
男子が身なりを気にしたり、おしゃれに気をつかうのは、おかしいと思う	3.5%	13.2%	2.1%



## ② 「学校への期待」をジェンダーチェック

では、ジェンダーについて学校でどのように取り組んだらよいとあなたは考えていますか。

## 「いいえ」と答えた人

	全体	男	女
日ごろから男女が一緒に行動するように、座席の配列やグループづくりに留意してほしい	22.5%	32.1%	21.0%
男女を問わず自立が必要ということを、学校生活の様々な場面で教師が示してほしい	6.9%	6.9%	6.6%
男子は将来のために、勉強でもスポーツでも厳しく指導してほしい（「はい」と回答した人）	55.5%	60.4%	55.4%
女子にも、新しい進路や職業分野に挑戦するよう励ます積極的な進路指導をしてほしい	6.3%	7.5%	6.6%
やはり男性の先生は指導力を発揮し、女性の先生はやさしく子どもに接してほしい （「はい」と回答した人）	41.8%	26.4%	44.6%
女性が主人公の教材や資料などを、積極的に授業に取り入れて指導してほしい	42.8%	39.6%	43.0%

## ③ 知っていますかチェック

学校の出席簿は男女別で「男子が先」というものが多かったようです。出席簿や並び方などの「男子が先」の習慣を変えようと、最近は、男女混合であいうえお順、誕生日順などの名簿が使われています。あなたはどのように思いますか。

	全体	男	女
A これまでのように、男女別で男が先でよい	25.7%	28.3%	26.2%
B 男女混合がよいと思うが、特に推進することでもない	59.5%	52.8%	59.1%
C 男女混名簿を実施するのがよい	13.1%	15.1%	13.1%

P T Aや父母会の保護者参加欄に、実際は母親が出席するのに父親の名前を書くことがよくあるそうです。母親も保護者のはずですが、あなたはどのように考えますか。

	全体	男	女
A やはり父親が代表であるから父親の名前を書く	28.0%	37.7%	27.3%
B おかしいと思いつつも、習慣上そうしている	31.1%	20.8%	32.0%
C 母親が参加するのであれば、当然母親の名前を書く	38.0%	37.7%	37.5%

#### IV. 調査結果に関する考察

小学生に関してはこの調査に関する限りあまりはっきりしたジェンダーバイアスはみられない。この年代では、自己の性に対する認識はまだ薄く、多様な価値観を受け入れる要素は多いように思われる。しかし男の子の方が、総じていわゆる男意識が強く現れている。「サッカークラブは男子だけがいい」と半数以上が答え、3割強が「保健係は女子、体育係は男子」というように係で女子と男子を分けた方がいいと答えており、役割分担意識の芽生えが読みとれる。

中学生の学校生活をチェックを見ると、100%近い生徒が「出席簿や名前を呼ばれる順序は、いつも男子が先で女子が後」と答えている。実際の授業で常に男子が先に呼ばれているのであろう。男女混合名簿は小山市では一部の小学校では実施されているが、中学校では今のところ皆無である。毎日の授業の中で、繰り返し「男子が先」に呼ばれていることは、生徒達の意識に非常に大きな影響を与える。ジェンダー意識の払拭からも、一日も早く全部の小中学校で混合名簿が実施されることが望まれる。

あなたの心の中をチェックの欄でも、「女は女らしく、男は男らしい方がいい」「結婚したら、男は家族を養うものだ」「力仕事は男にまかせよう」「運動部のマネージャーは女子がよい」と役割分担意識がすでにできあがっている。このことは、幼児期から教え込まれたジェンダーバイアスが中学生くらいになるとはっきりした形になって現れてくると見ることができる。

次に教師に対するチェック項目で、「持ち物の色を男女で分けている」「生徒が整列するとき、男女別々だ」には、ほぼ全員が「はい」と答えている。これも従来の慣習からくる区別である。幼い頃から必要以上に男女を分け、持ち物まで色分けしていることが、やがて子ども達に潜在的にジェンダー意識を身につけさせるのである。

教師自身の意識でも、「女に負けるなんてだらしがないといってしまう」「家事や育児は女の仕事と考えている生徒がいても、改めるよう指導してい

ない」と3割強が答え「男は男らしく、女は女らしく」の意識の現れと思われる。そして、その傾向は男性教師の方により顕著に見える。残りの7割の教師は生徒指導として役割分担を否定していても、現実には「男性教員は育児休暇を取りにくい雰囲気がある」と約半数が感じ、「来客にお茶を出すのはたいてい女性教師か女性職員」とほぼ全員が認めている。職場としても問題があり、早急な対応が求められる。

保護者にも、やはり「男性」「女性」に対する固定観念が見える。「男の子は将来のために、勉強でもスポーツでも厳しく指導して欲しい」「やはり男性の先生は指導力を発揮し、女性の先生は優しく子どもに接して欲しい」と約半数の保護者が答えている。「進学や就職などについては、女子の方が男子に比べて気が楽だ」と3割の親が思っているのは、女の子は将来夫に養って貰うのだからという気持ちの現れであろうか。

また、PTAの会合や懇談会に出席したり、役員になったりするのは母親が多いのに保護者名は父親の名で登録しているという答えは6割を越えている。

## 結びにかえて

学校は一般に男女の別なく平等な教育がなされている場だと思われている。確かに生徒達は性別に関わりなく同じカリキュラムを学び、同一の基準で評価されることになっている。しかし小山市における調査でも、これは、ある小学校・ある中学校を対象にしたほんの一回の調査ではあるが、この中にも学校教育の場で日常的に見られる性別役割分担意識やジェンダーによる決め付けがかいま見られる。

近年になってやっと学校教育の場で男女平等教育を推進するための多様な試みがなされるようになってきたが、ここで見落としとしていけないのは教師と親の意識改革であろう。しかし実践に当たっては多くの困難が予想される。それは教室内でジェンダー・バイアスを再生産している「隠れたカリキュラ

ム」の作用である。教師達がこのカリキュラムの作用と機能を十分に自覚しなければ真の意味の男女平等教育は達成されないであろう。なぜならこれまでの男女平等教育に用いられてきた補助教材などは「表のカリキュラム」のみを問題にしてきたからであり、しかもその対象に教師自身は入っていなかったからである。

総理府男女共同参画室で編集した「男女共同参画2000年プラン&ビジョン」の中で、『女性学・ジェンダー研究の活用』が教育・学習の具体的施策としてあげられている<sup>6)</sup>。

また、「とちぎ新時代女性プラン三期計画」の中では男女平等を目指す教育の中で『教職員の意識啓発をはかるための研修の充実』があげられている<sup>7)</sup>。

子ども達の中のジェンダー・バイアスには、家庭からくるもの、規則や習慣として組み込まれている学校の文化の中にあるもの、教師や親が直接言わなくても子ども達の間で自然とできた暗黙のルールのようなもの、また学校運営や教員間でのジェンダー・バイアスなど非常に広範なものが含まれている。

また、ジェンダー問題は思春期以前と以後とではかなり様相を異にするので、中高校生には性問題や異性に関する問題も含めて十分な調査と研究が必要である。

さて、ジェンダーに敏感な教育を目指して、教育の分野における性による不平等やジェンダー・バイアスをなくすため我々は何をなさねばならないのであろうか。単に学校がジェンダー形成を「こっそり手助けしている」ような現場を押さえることなく、なぜジェンダーの存在が不問に付され自明視されてしまうのか、その隠されたメカニズムを解明することである。またこれまで我々が使ってきた様々な教育的概念・理念の吟味から教育現場における意識改革に至るまで多くの解決すべき問題が山積しているのである。

隠れたカリキュラムの視点から、教師に意識化されにくい学級経営や教室管理の在り方に関しての共同研究などもなされるようになってきたのでその成果に期待しているところである。

## 謝辞

小山市女性問題懇話会の行った「ジェンダーチェックに関する調査報告書」の作成に当たっては小山市市民部女性行政課の皆様をはじめ調査に協力をしてくださった多くの方々に深く謝意を表します。

## [注]

- 1) 性別役割：集団や社会の中である個人が性別によって期待される行動様式で、性別役割において最も顕著なものは、男性にはお金を稼ぎ経済力を持つことを期待するのにも、女性に対しては家庭の中のごまごました家事を遂行することを期待するという、いわゆる性別分業観にそった家族内での役割観である。
- 2) 財東京女性財団編「女性問題研修プログラム開発報告書」 1996年  
p. 81～102
- 3) ステレオタイプ：特定な社会集団や社会の構成員の中で広範に受け入れられている固定的なイメージや画一的なイメージ、特に善悪の判断や感情的な好悪感を伴うイメージ
- 4) 財とちぎ女性センター編 「女性とメディア」 1998年  
p. 27～59
- 5) 小山市女性問題懇話会 「ジェンダーチェックに関する調査報告書」  
1998年 および 下野新聞 3月26日、朝日新聞 3月27日
- 6) 総理府男女共同参画推進本部 「男女共同参画社会2000年プラン」  
1997年 p. 82、83
- 7) 栃木県 「とちぎ新時代女性プラン三期計画」 1996年 p. 25、p. 69

## 参考文献及び資料

- 山口真・山手茂共編 「女性学概論」 亜紀書房 1988年  
江原由美子ほか 「ジェンダーの社会学」 新曜社 1994年  
金井淑子 「女性学の挑戦」 明石書店 1997年

(財)横浜市女性協会監修 「女性学ブックガイド」 三修社 1997年

J. P. マーティン 「女性にとって教育とは何であったか」東洋館出版  
1987年

井上輝子・江原由美子編 「女性のデータブック」 有斐閣 1992年

井上輝子 「女性学への招待」 有斐閣 1992年

(財)東京女性財団 「ジェンダーフリーな教育のためにⅡ」 1996年

総理府 「男女共同参画社会に関する世論調査」 1997年

(本学経営学部教授)